

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

タジキスタン甘草 BOPプロジェクト ～農民グループの所得向上をサポート～

タジキスタン国甘草生産事業準備調査（BOPビジネス連携促進）は、タジキスタン南部のハトロロン州農民がグループ組織を作って甘草を生産し、日本企業の宏輝システムズ（株）の現地合弁企業に供給することにより、所得を向上することを目的として、2013年3月から2016年3月までの3年間にわたり実施されています。

甘草はマメ科の多年草で、北緯35度の前後の地域で、河川敷きなどの荒れ地に群生する植物です。その根は古来、鎮痛消炎剤として知られており、ピラミッドの副葬品や正倉院御物にも含まれています。現在も甘草は国際商品として取引され、精製されるグリチルリチン酸は必須医薬品であり、また小柴胡湯など漢方薬の80%に処方されているほか、目薬、化粧品、歯磨き粉、ガム、健康食品などに幅広く利用されています。読者の方もよく目にすると思います。



甘草の収穫風景



甘草根を加工する工場とコファルニコン川

甘草根から抽出される薬品原料のクルードグリチルリチン酸で、世界最大の出荷実績を持つ医薬品原料製造販売会社である宏輝（株）の子会社・宏輝システムズ（株）は、2011年にタジキスタンのハトロロン州に進出し、合弁企業JSC AVALIN社（タジキスタン語で「先駆者」の意味）を設立しました。2012年から現地農民を雇用して原料である甘草根を採取し、クルードグリチルリチン酸を生産する工場の操業を開始して、日本に輸出しています。

タジキスタンの人口に占める貧困層の割合は、1999年の92%から減少しているものの、2012年でもまだ40%を占めています。GDPは年間総額65億ドル、1人当たりでは836ドルに過ぎず、中央アジアの最貧国です。国民生活はGDPの3～5割を占める近隣諸国への出稼ぎ労働者の仕送りによって支えられている状態です。

ハトロロン州の南部地域は農業が盛んで、小麦と綿花の二毛作を行っています。市場価格の低迷や市場へのアクセスの悪さなどから貧困率が高い地域です。このため、現金収入を求めて、男性の多くはロシア、カザフスタンに出稼ぎに行っており、農業は女性が行っている状況にあります。実際、昼間に畑を見渡すと働いている農民はほとんどが女性です。

こうしたことから、現金収入を増やす方策として、地元の農民グループが甘草根を収集して乾燥し、まとめてAVALIN社に販売するBOPビジネスが開始されました。すでに資源再生を考慮した収集ルールの決定、集荷・乾燥場所の選定など、BOPビジネスの準備が整い、11月からビジネスが開始される運びとなっています。

中国では甘草根を乱獲した結果、資源が枯渇し、現在は輸出が禁止されています。タジキスタンでは甘草根を乱獲して資源をなくさないよう、再生を考慮した収集技術の習得が計画されているほか、甘草根の再生試験栽培が9月に開始されました。

現地はパミール高原に発し、タジキスタン・アフガニスタン国境を流れるビヤンジ川が北部から流入するバフシ河と合流してアムダリア河に名称を変える地点の下流地域で、首都ドゥシャンベから流れてくるコファルニコン川にも沿った地域です。夏季は50度、冬季は氷点下になる厳しい気候の地です。丘陵地帯に草木は生えていませんが、川沿いは緑が豊かで、かんがい水路が四通八達しています。農民グループは、BOPビジネスを発展させて、将来的にはアムダリア河の対岸にあるアフガニスタンの甘草根も収集したいと意欲を見せています。

（文責：国際開発センター 主任研究員 渡辺 博）